

東南アジア (ASEAN)



1 農・畜産業の概況

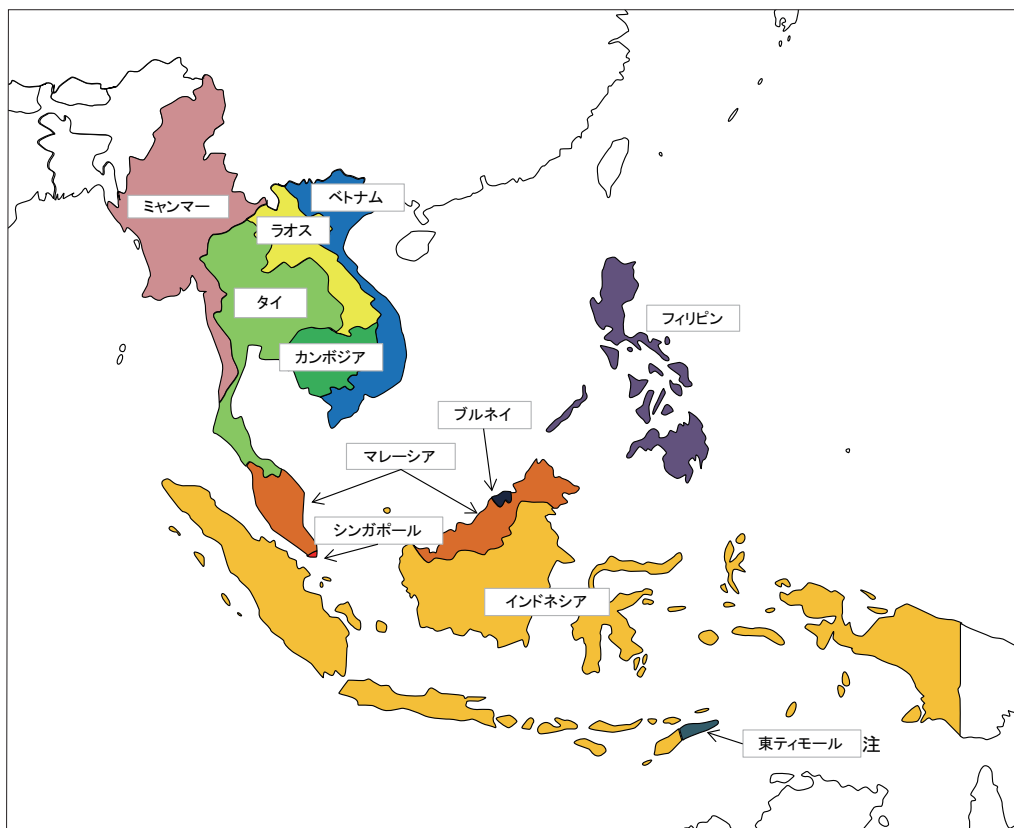
アジア開発銀行によると、ASEAN（東南アジア諸国連合）加盟10カ国（図1）のうち、シンガポールとブルネイは、GDPに占める農業の割合が1%以下と低い一方、近年、経済成長の著しいマレーシア、タイ（2011年）、インドネシア、フィリピン、ベトナムの5カ国は、9～18%となっている。これら5カ国では、都市と農村の経済格差が顕著になっている中で、農村は失業者の緩衝機能を果たしているといわれている。また、米（コメ）などの主要作物の価格が政策的に低く抑えられているため、農業分野の算出額が増加しないという特徴も有している。上記以外の残り3カ国は、カンボジアが33.8%、ラオスが27.6%（2012年）、ミャンマー

が30.5%（2012年）と高くなっている。これらの3カ国は、政情不安が長引いたことなどから農業以外の産業の発展が遅れており、相対的に農業の比重が高い。しかし、政情の安定化に伴う経済の発展により、その割合は低下してきている。

国別には、マレーシアは、油ヤシ、ゴムなど永年性作物の栽培が多い一方、フィリピンは、トウモロコシ、米などの穀物が中心となっているという特徴がある。

畜産業については、食習慣、宗教、農業の形態などを反映して、各国ごとに畜種の重要度が異なっているため、品目ごとの生産量には大きな差がある（データは断りのない限り2013年の数字）。

図1 ASEAN加盟国



資料：機構作成

注：東ティモールはASEAN非加盟国

ASEAN諸国の主要穀物および畜産物の生産量を見ると、穀物が多くを占めており、中でも米が多い。また、主要な畜産物は、豚肉および鶏肉であるが、宗教上の理

由から豚肉を消費しないイスラム教徒の人口が多いインドネシアやマレーシアなどでは鶏肉が多く、宗教上の制約のないベトナムやフィリピンでは豚肉が多い（表1）。

表1 ASEANの主要穀物および畜産物の生産量（シンガポール、ブルネイを除く）

（単位：千トン）

国	年	米	トウモロコシ	牛肉	豚肉	鶏肉	鳥卵	生乳
マレーシア	2009	2,511	36	30	206	1,058	524	71
	2010	2,465	48	32	234	1,140	601	76
	2011	2,576	60	30	231	1,174	635	80
	2012	2,599	84	30	233	1,210	657	84
	2013	2,627	87	31	231	1,246	678	88
タイ	2009	32,116	4,884	211	871	1,154	970	841
	2010	34,409	5,124	223	895	1,220	980	911
	2011	36,128	5,266	207	880	1,243	996	982
	2012	37,469	5,224	210	949	1,319	1,054	1,022
	2013	36,063	5,372	195	967	1,379	1,063	1,095
インドネシア	2009	64,399	18,070	444	649	1,404	1,308	1,278
	2010	66,469	18,786	472	695	1,540	1,382	1,313
	2011	65,757	18,084	521	721	1,665	1,284	1,379
	2012	69,056	19,871	546	729	1,734	1,416	1,365
	2013	71,280	18,975	586	743	1,838	1,504	1,388
フィリピン	2009	16,266	7,034	288	1,629	827	408	14
	2010	15,772	6,377	300	1,636	869	424	16
	2011	16,684	6,971	301	1,642	920	441	16
	2012	18,032	7,407	295	1,653	985	461	18
	2013	18,439	7,377	297	1,681	1,047	469	20
ベトナム	2009	38,950	4,372	369	3,036	529	273	311
	2010	40,006	4,607	384	3,036	457	321	339
	2011	42,398	4,836	387	3,099	494	345	377
	2012	43,662	4,803	390	3,160	526	365	414
	2013	44,039	5,191	379	3,218	531	378	487
ラオス	2009	3,145	1,134	44	55	18	15	7
	2010	3,071	1,021	45	59	20	15	7
	2011	3,066	1,096	46	57	20	16	8
	2012	3,489	1,125	48	62	21	16	7
	2013	3,415	1,150	48	64	21	17	7
カンボジア	2009	7,586	924	75	115	23	20	24
	2010	8,245	773	73	105	20	22	24
	2011	8,779	717	73	110	19	22	23
	2012	9,291	951	73	99	19	23	23
	2013	9,390	927	73	99	18	23	23
ミャンマー	2009	32,682	1,245	178	535	923	353	1,482
	2010	32,580	1,376	234	585	1,016	381	1,620
	2011	29,010	1,485	254	619	1,079	412	1,684
	2012	28,080	1,500	260	620	1,080	421	1,629
	2013	28,767	1,700	262	621	1,082	425	1,708

資料：FAOSTAT

注1：牛肉は水牛肉を、鳥卵は鶏卵以外の鳥の卵を、生乳は水牛、めん羊・ヤギの乳を含む。

2：トウモロコシは青刈トウモロコシを含む。

3：過去にさかのぼって数値が変更される場合がある。

2 東南アジア諸国の畜産の動向

(1) 酪農・乳業

ASEAN諸国では、牛乳・乳製品は、一般的な食材ではなく、また、気候条件が酪農にあまり適していないことや、良質な飼料の自給が困難なこともあり、酪農・乳業は欧米諸国に比べて盛んではなかった。また、流通やインフラの関係から、消費される乳製品は、主に全粉乳などの粉乳類か、缶入り加糖れん乳であった。しかし、近年は冷蔵施設の普及や経済発展に伴い、特に都市部およびその周辺では飲用乳製品の需要も高まりつつある。

各国とも、脆弱（ぜいじゃく）な酪農生産基盤により牛乳・乳製品の自給にはほど遠い現状にあるが、生乳生産、工場インフラ、地理的条件などを総合的に考慮すると、将来的には、輸入乳製品からの還元乳の製造を含め、タイやベトナムはインドシナ半島の牛乳・乳製品供給基地になり得るとみられている。また、2億を超える人口を有し、近年、経済発展を遂げているインドネシアについても、乳製品需要の伸びが期待されており、ベトナムなどとともに、外資系企業の参入も積極的に行われている。

一方で、ASEAN各国では、乳製品の定義や統計上の取り扱いがあいまいであることから、乳製品需給動向の正確な把握は困難となっている。

①生乳生産動向

2013年の乳用牛の飼養頭数は、乳製品需要の高まりを背景にベトナム、フィリピン、マレーシアで増加したが、インドネシアおよびタイでは減少した（表2）。

インドネシアの2013年の乳用牛飼養頭数は、前年比27.5%減の44万4000頭であった。乳用牛の大部分はジャカルタなどの大消費地に隣接するジャワ島の冷涼な気候の山岳地域で飼養されている。繁殖牛の遺伝的能力が低く、零細な経営が多くを占めているという課題もあり、インドネシア政府は、乳用牛増頭計画を掲げ、豪州から初妊牛を輸入している。なお、2014年までに牛肉の国内自給率を90%にするという目標のために、

2012年から生体牛および牛肉の輸入規制を行った結果、国内の牛肉需給がひっ迫し、これを賄うために、国内の乳用牛のと畜頭数が増加し、乳用牛が大幅に減少することとなった。

マレーシアの2013年の乳用牛飼養頭数は未公表であるが、乳用牛の大半は半島部で飼養されている。飼養頭数が多いのは、シンガポールに国境を接するジョホール州、首都クアラルンプール近郊のスランゴール州、北西部のペラク州などである。また、乳用牛は、ホルスタインとインド系在来乳牛のレッドシンディ種やサヒワール種との交雑種が過半を占め、それ以外はゼブー種となっている。2013年の生乳生産量は、7万7000トン（前年比6.9%増）となっている。歴史的に天然ゴムや油ヤシのプランテーションとしての土地利用が多く、反すう家畜のための飼料基盤整備が課題となっている。

フィリピンの2013年の乳用牛飼養頭数は、わずかに2万1100頭（前年比9.2%増）となっており、そのほか、水牛が乳用として飼養されている。2013年の生乳生産量は1万7000トン（前年同）となり、うち約6割が牛由来、残りの4割は水牛乳とヤギ乳とみられている。なお、生乳換算による自給率は2%程度である。

タイの2013年の乳用牛飼養頭数は、51万2200頭（同11.4%減）であった。1999年から2005年まで飼養頭数は増加傾向で推移していたが、2006年に原油高などによる生産コストの上昇に伴い酪農家戸数が減少し、飼養頭数は大きく減少した。2008年後半に入り、原油価格や飼料価格などの低下を受け、その後の飼養頭数は回復基調にあったが、2013年は小規模農家の離農が進み、飼養頭数は減少に転じている。

ベトナムの2013年の乳用牛飼養頭数は、18万6400頭（同11.6%増）であった。乳用牛の約5割は、乳製品の主要消費地となるホーチミン近郊で飼養されている。フランス植民地時代に導入されたライシン種（ゼブー種）に、近年、ホルスタイン種を交配し、生乳生産量の増加に取り組んでいる。同年の生乳生産量は45万6000トン（同19.6%増）となっている。

表2 乳用牛飼養頭数と生乳生産動向 (2013年)

(単位：千頭、千トン)

国名	飼養頭数	前年比 (増減率)	生乳生産量	前年比 (増減率)
インドネシア	444.0	▲ 27.5%	1,465	52.7%
マレーシア	n/a	-	77	6.9%
フィリピン	21.1	9.2%	17	▲ 8.1%
タイ	512.2	▲ 11.4%	880	▲ 13.9%
ベトナム	186.4	11.6%	456	19.6%

資料：各国政府統計、FAOSTAT

注1：マレーシアの飼養頭数は半島部のみで、サバ、サラワク州を含まない。

2：フィリピンの生乳生産量は水牛乳およびヤギ乳を含む。

②牛乳・乳製品の需給動向

ASEAN諸国では、牛乳・乳製品の国内消費量に占める輸入量(生乳換算)の割合は一般的に高く、多くの国で半分以上を占めている(表3)。乳製品輸入は粉乳が主であり、小分けして販売されるほか、消費量の多いLL牛乳や缶入り加糖れん乳なども、輸入の全粉乳や脱脂粉乳から還元製造される割合が高い。

インドネシアの2013年の牛乳・乳製品の1人当たり年間消費量は、14.8キログラム(前年比2.9%増)と経済発展に伴い増加傾向にある。

マレーシアの2011年の牛乳・乳製品の1人当たり年間消費量は、32.2キログラム(同8.1%減)と、ASEAN諸国の中でも多くなっている。2013年の同国の牛乳・乳製品の輸出量は約44万トンとなっているが、ニュージーランドや豪州から輸入した粉乳を原料として、国内で調製品に加工して再輸出しているためである。フィリピンの2013年の牛乳・乳製品の1人当たり年間消費量は、15.7キログラム(同3.2%増)となった。国内で流通する牛乳・乳製品のほぼ全量が、ニュージーランド、米国、豪州などからの輸入品および輸入品を原料とした加工品となっており、生鮮牛乳の飲用習慣はほとんどない。

タイの2013年の牛乳・乳製品の1人当たりの消費量は、29.4キログラム(同3.2%減)となったが、デンマーク政府の協力により設立されたタイ酪農振興機構や外資系企業による牛乳・乳製品の生産拡大及び学乳制度の導入などにより牛乳・乳製品の近年の消費量は増加傾向で推移している。なお、2013年の牛乳・乳製品の輸出量は約12万トンとなっている。これは、豪州などから輸入した脱脂粉乳などを原料として、還元乳やれん

乳などへ再加工し、周辺国などに輸出しているためである。

表3 牛乳・乳製品の需給動向 (2013年)

(単位：千トン、kg)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	1,465	1,765	3,157	73	14.8
マレーシア	77	1,129	763	443	32.2
フィリピン	17	1,278	1,186	109	15.7
タイ	880	758	1,515	123	29.4
ベトナム	456	306	751	11	16.4

資料：FAOSTAT、ベトナムの生産量は政府統計

注1：消費量は、「生産量+輸入量-輸出量」で算出。

2：1人当たり消費量には、バターを除く数値であり、マレーシアは2011年。

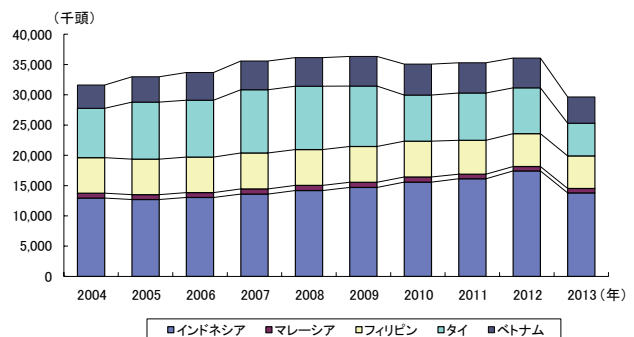
(2) 肉用牛・牛肉産業

ASEAN諸国では、役用としての水牛が農作業の機械化により減少する一方、肉用牛の飼養頭数が増加しているが2013年はインドネシアおよびタイで大幅に減少した(図2、表4)。

牛肉需要を見ると、食習慣や経済状況の差が大きく、国ごとに1人当たり消費量に大きな差がある。また、1人当たり消費量は各国とも横ばいで推移している。

牛肉消費が伸びない要因は、牛肉が豚肉・鶏肉に比べて高価であること、宗教上、役用である牛を食さないことなどの理由が挙げられる。

図2 肉用牛・水牛飼養頭数の推移



資料：各国政府統計

表4 牛飼養頭数と牛肉生産量（2013年）

(単位：千頭、千トン)

	飼養頭数		牛肉生産量 (水牛を含む)	前年比 (増減率)
	肉用牛	水牛		
インドネシア	12,686	1,110	543	▲ 0.6%
マレーシア	668	64	52	0.9%
フィリピン	2,492	2,886	297	0.7%
タイ	4,531	877	195	▲ 7.3%
ベトナム	1,769	2,560	371	▲ 3.0%

資料：各国政府統計

注1：マレーシアの肉用牛の飼養頭数は半島部のみで、サバ、サラワク州を含まない。

注2：マレーシアの肉牛の飼養頭数は乳用牛を含む。

①牛の生産動向

インドネシアの2013年の肉用牛飼養頭数は、1268万6000頭（前年比20.6%減）と大幅に減少した。これは、前述の通り、2012年から生体牛および牛肉の輸入規制を行った結果、国内の牛肉需給がひっ迫し、と畜頭数が増加したことによる。地域別では、首都ジャカルタのあるジャワ島が飼養頭数全体の約4割を占めている。また、豪州などから肥育もと牛を輸入して3カ月程度肥育するフィードロット産業も盛んである。なお、水牛も肉用牛同様にと畜頭数が増加した結果、飼養頭数が減少し110万頭となっている。

マレーシアの2013年の肉用牛飼養頭数は、頭数が把握できる半島部で、66万8000頭（同0.6%増）であり肉用牛が9割を占め、水牛が1割である。水牛は役に供される機会の減少に伴い、飼養頭数も減少している。

フィリピンの2013年の肉用牛飼養頭数は、249万2000頭（前年同）、水牛飼養頭数は288万6000頭（同1.6%減）となっている。豪州などから肥育もと牛を輸入する商業的なフィードロット経営も見られるが、肉用牛・水牛ともに飼養頭数が20頭未満の小規模経営が全体の9割以上を占めている。このため、同国政府は農村部での零細経営の収入確保などを目的とした新技術の普及促進、専門家の育成などの畜産振興策を打ち出している。

タイの肉用牛飼養頭数は、政府の肉牛振興政策などにより2001年以降微増傾向で推移してきたが、2013年は、飼料価格の上昇などにより、飼養頭数を減らしてきたことなどにより、453万1000頭（同28.5%減）

と大幅に減少した。また、役に供されている水牛の飼養頭数は、農業の機械化が進んだことから87万7000頭（同29.4%減）と大幅に減少している。タイでは、ミャンマーから生体牛を輸入し、国内で肥育した後、ラオスやマレーシアに生体で輸出している。

ベトナムの2013年の肉用牛飼養頭数は、工業化による飼養地減少、飼養価格の上昇などにより176万9000頭（同22.9%減）と大幅に減少している。ベトナムは、生体牛をタイ、ラオス、カンボジアなどの近隣諸国や豪州から輸入して肥育を行っている。

②牛肉の需給動向

2013年の牛肉生産量はインドネシアが54万3000トン（前年比0.6%減）、マレーシアは5万2000トン（同0.9%増）、フィリピンは29万7000トン（同0.7%増）、タイは19万5000トン（同7.3%減）、ベトナムは37万1000トン（同3.0%減）となった。

インドネシアの2013年の牛肉（水牛肉を含む）の1人当たり年間消費量は、2.6キログラムとなっている。牛肉消費は、民族・宗教によって慣習が異なることなどから、地域ごとに異なり、ジャカルタなど一部地域に集中している。

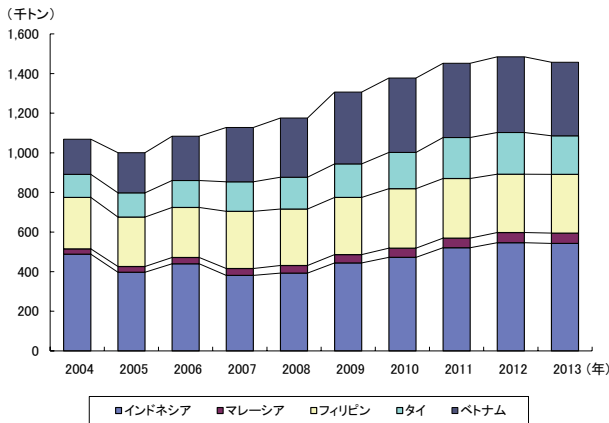
マレーシアの2013年の牛肉の1人当たり年間消費量は、7.7キログラム（前年比7%増）と東南アジア諸国の中でも最大である。輸入牛肉の割合が約8割と大きくなっている。主な輸入先はインド、豪州である。

フィリピンの2013年の牛肉（水牛肉を含む）の1人当たり年間消費量は、4.1キログラムで前年並みの水準であった。牛肉自給率は7割程度であり、主な輸入先国は、インド、ブラジル、豪州などである。このうち、インドからの安価な水牛肉はコンビーフに加工されるなどして食されている。

タイの2013年の牛肉（水牛肉を含む）の1人当たり年間消費量は、2.6キログラムと前年比7.1%減となった。牛肉輸入量は、6万3000トンであり、消費量に占める割合は4割程度となっている。

ベトナムの2013年の牛肉（水牛肉を含む）の1人当たり年間消費量は、7.4キログラムで前年並みの水準であった。牛肉自給率は5割程度であり、主な輸入先国は、豪州、ニュージーランド、インド、米国などである。

図3 牛肉・水牛肉生産量の推移（2013年）



資料：各国政府統計、FAOSTAT

表5 牛肉の需給動向

(単位：千トン、kg)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	543	45	587	1	2.6
マレーシア	52	187	227	12	7.7
フィリピン	297	118	412	3	4.1
タイ	195	63	152	106	2.6
ベトナム	371	303	674	0	7.4

資料：各国政府統計、FAOSTAT

注1：水牛肉を含む。

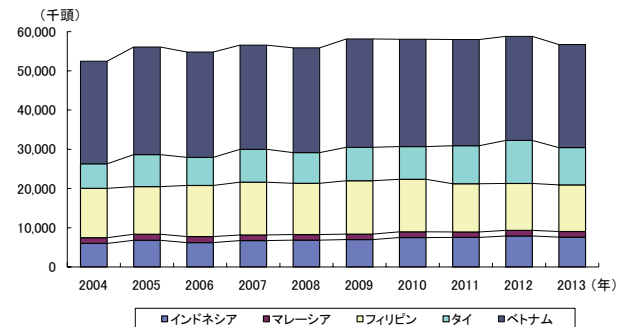
2：インドネシアおよびタイの消費量は、「生産量+輸入量-輸出量」で算出。

3：マレーシアは半島部のみで、サバ、サラワク州含まない。

(3) 養豚・豚肉産業

ASEAN諸国では、インドネシアをはじめ宗教上の理由から豚肉を食さないイスラム教徒の人口が多いが、国によって豚肉の消費量には大きな格差があり、国の政策上の位置付けもさまざまである。他方、イスラム教徒が多数を占める国でも、中国系住民などの豚肉需要はあり、飼養規模、地域などにおいて限定的ではあるものの、養豚業は行われている（図4）。

図4 豚飼養頭数の推移



資料：各国政府統計

①豚の生産動向

ASEAN諸国では、口蹄疫や豚繁殖・呼吸障害症候群（PRRS）などの家畜疾病が継続して発生していることもあり、家畜衛生対策が喫緊の課題である。

インドネシアの豚飼養頭数は2007年以降増加傾向で推移してきたが、2013年は761万頭（前年比3.7%減）とわずかに減少した（表6）。

表6 豚飼養頭数と豚肉生産量（2013年）

(単位：千頭、千トン)

国名	飼養頭数	生産量	前年比 (増減率)
インドネシア	7,611	298	28.6%
マレーシア	1,425	217	▲0.5%
フィリピン	11,901	1,681	1.7%
タイ	9,511	967	1.9%
ベトナム	26,261	3,218	1.8%

資料：各国政府統計、FAOSTAT

マレーシアの2013年の豚飼養頭数は、143万頭（前年同）とわずかである。

フィリピンは宗教的な制約が少ないこともあり、豚の飼養頭数が多いが、2008年の1370万頭をピークに、近年は、減少傾向で推移しており、2013年は1190万頭（前年同）となった。

タイの豚飼養頭数は、価格変動や疾病などの影響により増減を繰り返して推移しており、2013年は951万頭（前年比13.4%減）となった。

ベトナムは、アジアでは中国に次いで豚飼養頭数が多い。近年は、2009年の2769万頭をピークに減少傾向で推移しており、2013年は2626万頭（前年比0.8%減）となっている。

②豚肉の需給動向

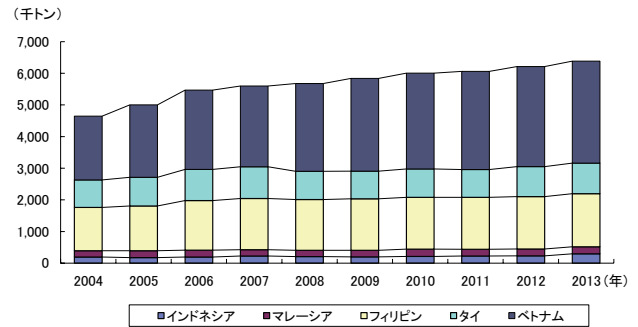
2013年の豚肉生産量は、インドネシアが29万8000トン（前年比28.6%増）、マレーシアは21万7000トン（同0.5%減）、フィリピンは168万1000トン（同1.7%増）、タイは96万7000トン（同1.9%増）、ベトナムは321万8000トン（同1.8%増）となり、これらの国では全体的に増加傾向で推移している（図5）。

2013年の豚肉消費量は、インドネシアが29万9000トン（同28.4%増）、マレーシアは21万6000トン（同3.6%減）、フィリピンは177万トン（同1.3%増）、タイは93万5000トン（同1.2%増）、ベトナムは323万3000トンとなった（表7）。

ASEAN諸国の豚肉消費動向は、宗教の影響を強く受けており、2013年の1人当たり豚肉消費量は、イスラム教徒が人口の大半を占めるインドネシアで3.0キログラムであったのに対し、タイで13.0キログラム、ベトナムで35.0キログラム、食肉に関する宗教的制約の少ないフィリピンで18.4キログラムとなっており、国による差が大きくなっている。

一方、マレーシアでは、イスラム教を国教と位置付けているものの、伝統的に豚肉を好む中国系住民（非ムスリム）などが人口の4割程度を占めていることから、2013年の1人当たり豚肉消費量は7.5キログラムとなっており、非ムスリムに限ると同18.7キログラムである。

図5 豚肉生産量の推移（2013年）



資料：各国政府統計、FAOSTAT

表7 豚肉の需給動向（2013年）

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	298	1	299	0	3.0
マレーシア	217	12	216	13	7.5 * (18.7)
フィリピン	1,681	95	1,770	6	18.4
タイ	967	3	935	35	13.0
ベトナム	3,218	35	3,233	20	35.0

資料：各国政府統計、FAOSTAT

注1：水牛肉を含む。

注2：インドネシアおよびタイの国内消費量は、「国内生産量+輸入量-輸出量」で算出。

注3：マレーシアは半島部のみで、サバ、サラワク州含まない。

注4：マレーシアの（）内は非ムスリムのデータ。

（4）養鶏・鶏肉産業

①鶏の生産動向

ASEAN諸国では、宗教上の制約がないことから、ブロイラーや採卵鶏の飼養が盛んであり、在来鶏を中心に、アヒルなどの家きんが飼養されている。

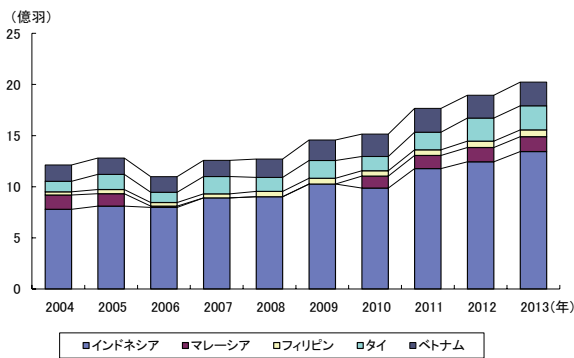
インドネシアは、ASEAN諸国で鶏の飼養羽数が最多である（図6、表8）。ブロイラーの飼養羽数は、南スラウェシ州などで発生した鳥インフルエンザの影響を受け、2010年に9億9000万羽まで減少したが、2013年には前年比8.0%増の13億4419万羽まで回復し、鶏肉生産量は同7.0%増の149万8000トンとなった。2013年の採卵鶏の飼養羽数は同0.8%増の約2億7678万羽、鶏卵の生産量は同7.4%増の122万4000トンとなった。

マレーシアのブロイラー飼養羽数は、2005年の鳥インフルエンザの発生により減少がみられたものの、徐々に回復し、2013年には1億4510万羽となった。また、鶏肉生産量は145万8000トン(同6.1%増)となった。採卵鶏の飼養羽数は約5559万羽、鶏卵の生産量は68万4000トン(同6.2%増)となった。

フィリピンの2013年のブロイラー飼養羽数は、約6681万羽(同9.4%増)、鶏肉生産量は104万7000トン(同6.3%増)となった。採卵鶏の飼養羽数は約3157万羽(同2.5%減)、鶏卵の生産量は42万8000トン(同1.6%増)となった。

タイは、鳥インフルエンザが発生した2004年以降、EUや日本向けの生鮮鶏肉の輸出が停止していたが、EU向けは2012年7月1日に、日本向けは2013年12月25日に解禁した。このため、ブロイラーの飼養羽数は2012年に2億2593万羽(同30.5%増)、2013年が2億3560万羽(同4.3%増)と増加傾向で推移している。採卵鶏の飼養羽数は2004年以降大きな増減を繰り返していたが、2012年に5112万羽(同3.5%増)、2013年が5103万羽(前年同)となった。また、2013年の生産量は、鶏肉が151万2000トン(同4.6%増)、鶏卵が64万7000トン(同1.4%増)となった。

図6 ブロイラー飼養羽数の推移



資料：各国政府統計

注：2007～2009年のマレーシアは、データが公表されていない。

表8 鶏の飼養羽数と鶏肉・鶏卵の生産量(2013年)

(単位：千羽、千トン)

国名	飼養羽数		生産量			
	ブロイラー	採卵鶏	ブロイラー肉	前年比(増減率)	鶏卵	前年比(増減率)
インドネシア	1,344,191	276,777	1,498	7.0%	1,224	7.4%
マレーシア	145,097	55,588	1,458	6.1%	684	6.2%
フィリピン	66,810	31,570	1,047	6.3%	428	1.6%
タイ	235,595	51,029	1,512	4.6%	647	1.4%
ベトナム	231,763		747	2.4%	450	6.2%

資料：各国政府統計、FAOSTAT

注：鶏卵は1個58グラムで換算。

②鶏肉の需給動向

前述の通り、鶏肉は宗教上の制約がないことから、ASEAN諸国では最も身近で重要な動物タンパク源となっており、各国とも生産と消費が伸びている(図7、表9)。需要の増加を背景に、外資による食鳥処理場の整備や大手ファストフードの参入などが増加している。

インドネシアの鶏肉の生産量は149万8000トン、1人当たり年間鶏肉消費量は7.5キログラムとなっている。飼養羽数に比較して小さな値となっているのは、コールドチェーンが未発達であることなどにより、食鳥処理場以外で処理したり、生きたまま販売したりするケースが多数を占め、統計上全体の生産量が把握できないためと考えられる。

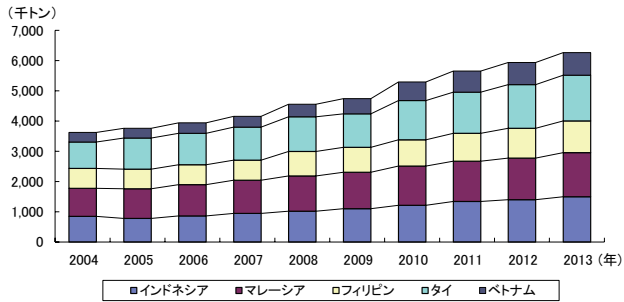
マレーシアの1人当たり年間鶏肉消費量は、52.6キログラムとなった。なお、隣国インドネシアの鶏肉消費の伸びを見込んでマレーシア資本の鶏肉加工業者が、輸出向けの投資を加速させている。

フィリピンの1人当たり年間鶏肉消費量は、11.9キログラムとなった。台風被害の少ないミンダナオ地域では、食鳥処理場の処理能力の拡大などにより、鶏肉調製品の輸出量が増えている。

タイの1人当たり年間鶏肉消費量は、13.7キログラムとなった。タイの国内消費と輸出の割合はほぼ50%程度ずつとなっている。2004年1月以降、鶏肉の主要輸出先国が、鳥インフルエンザ発生により同国からの家きんなどの輸入一時停止措置を実施したため、輸出は、冷凍鶏肉から鶏肉調製品に移行してきたが、2012年以降EU、日本の輸入解禁により生鮮冷凍鶏肉も増加傾向で推移している。

ベトナムの1人当たり年間鶏肉消費量は、12.4 キログラムとなった。同国の生産部門に対しては、人口増加による鶏肉消費の拡大を見込んだ外資の参入が見込まれている。

図7 プロイラー生産量の推移



資料：各国政府統計、FAOSTAT

表9 プロイラーの需給動向 (2013年)

(単位：千トン、kg)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	1,498	1	1,499	0	7.5
マレーシア	1,458	58	1,488	28	52.6
フィリピン	1,047	99	1,139	7	11.9
タイ	1,512	2	783	731	13.7
ベトナム	747	500	1,247	0	12.4

資料：各国政府統計、FAOSTAT

注1：消費量は、「生産量+輸入量-輸出量」で算出。
 注2：マレーシアは半島部のみで、サバ、サラワク州含まない。

③鶏卵の需給動向

ASEAN諸国には、鶏卵を粉卵や液卵に加工する施設がほとんどないため、市場動向に応じて価格が乱高下しやすい傾向がある。また、価格の変動に伴って生産量を調整する需給安定機能が十分に働かないことから、頻繁に供給過剰問題を抱えることとなる。

1人当たり鶏卵消費量は、インドネシアが4.9キログラム、マレーシアが20.5キログラム、フィリピンが4.0キログラム、タイが12.4キログラム、ベトナムが3.8キログラムと、国によって大きな開きがある(表10)。

表10 鶏卵の需給動向 (2013年)

(単位：千トン、kg)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	1,224	7	1,232	0	4.9
マレーシア	684	0	602	82	20.5
フィリピン	428	3	430	0	4.0
タイ	647	4	625	25	12.4
ベトナム	450	0	448	2	3.8

資料：各国政府統計、FAOSTAT

注1：鶏卵は1個58グラムで換算。
 注2：マレーシアは半島部のみで、サバ、サラワク州含まない。